

令和元年6月26日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03071

研究課題名(和文)「開発と平和のためのスポーツ」における貧困削減

研究課題名(英文) Poverty Reduction in the Area of "Sport for Development and Peace (SDP)"

研究代表者

岡田 千あき (Okada, Chiaki)

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号：40335401

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、貧困削減に対するスポーツの寄与を検討するために、ジンバブエ、カンボジア、オランダ、香港の4か国において現地調査を行った。

その結果、スポーツ実施は、「個人」「対人」「コミュニティ」「組織」「社会」などの異なるレベルで成果を示したが、例えば、活動参加者が同じ能力を身に付けても、属する社会によって成果に差があること、すなわち、スポーツ実施による絶対的貧困への寄与は一般化できるが、相対的貧困については個別事例の特殊性が大きいことが明らかになった。スポーツの貧困削減への寄与は、社会、経済状況に左右される、裨益者に直接働きかける主体のスポーツの意味づけが重要である、という結論に至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究のまとめとして、12月に行われたホームレスワールドカップメキシコ大会において、ジンバブエ、カンボジア、オランダ、香港の4か国の関係者に対して研究成果のフィードバックを行うと同時に、今後の連携の可能性についての協議を開始した。本研究が終了した2019年3月現在においても、これらの国々との良好な関係性は継続されており、研究成果の有効な活用方法と新たな研究テーマの設定について意見を交わしている。また、これまでに国ごとに学会発表や論文投稿を進めてきたが、今後、日本を含めた5か国での現地調査の結果を比較検討すべく、論文投稿をはじめ書籍の出版や講演会の開催などの計画している。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to verify the contribution of sport on the poverty reduction in four countries; Zimbabwe, Cambodia, Netherlands and Hong Kong. As the results, the sport program in each country showed some achievements in the different level, intra-personal, inter-personal, community, organization and society, refer to the Social Ecological Model (SEM), however the context of contribution vary in each country's case. Although the contributions of sport on the absolute poverty were clearly shown, the contributions to the relative poverty were not in generalized because of the specificity of the individual backgrounds. The meaning of sport in the context of poverty reduction will be; 1) influenced by the socio economic circumstances, and 2) defined the recognition about the meaning of sport by the stakeholders.

研究分野：スポーツ社会学、開発学

キーワード：開発と平和のためのスポーツ(SDP) 貧困削減 ジンバブエ カンボジア オランダ 香港 フットサル サッカー

1. 研究開始当初の背景

「開発と平和のためのスポーツ(Sport for Development and Peace: SDP)」分野は、1990年代半ばから急速に発展してきた。我が国でも東京五輪招致に際して「スポーツ・フォー・トゥモロー」「スポーツ国際貢献」の実施が国際的に約束され、開発学、スポーツ科学の複合領域として注目が高まっている。日本体育学会では、スポーツ国際開発分野の新設が検討されており、本分野の研究を進めることは、我が国の政策上、学術上の両方の意味において時代の要請であり、喫緊の課題であった。

この問題意識を元に主に質的調査の結果から、複数の現場においてスポーツに期待され、付与される意味を検討してきた。カナダのスポーツ政策×先住民の権利、カンボジアのサッカー×社会開発、マレーシアの駅伝×青少年育成、ジンバブエの野球×HIV/AIDS啓発などを取り上げたが、①対象とする開発課題は他の社会問題と複雑に絡み、さらに時間の経過と共に様相が変化する、②スポーツと一口に言っても幅広く、各競技への期待の相違幅が予想以上であった、という理由から共通の指標を導き出すことが容易ではなかった。「国×スポーツ×開発課題」の組み合わせが無限にある一方で、客観的な評価が難しく、さらに全ての課題の根本には「経済的な貧困がある」という事実を再認せざる得なくなった。事例の検証が多様なスポーツのあり方を提示する一方で、スポーツが貧困削減に寄与できるのか、できるとしたらスポーツのどの特徴に依拠してか、という本質的な疑問が研究を進めるにつれて増幅し、貧困に正面から取り組んでこそ「開発と平和のためのスポーツ」と言えるのではないかという考えに至った。

2. 研究の目的

ホームレスワールドカップは、世界各国のホームレスのみが参加できるフットサルの世界大会であり、「ホームレス状態を社会からなくすこと、ホームレス状態にある人々が自らの人生を変えるきっかけを作ること」を目的としている。2003年から毎年開催され、ポーランドで開催された2013年大会には64ヶ国から500人以上が参加した。

ホームレスを定義するのは困難であり、単に貧しくて住む家がないのみでなく、失業、犯罪、薬物使用、アルコール依存、精神疾患などの複数の問題を抱える者が多い。さらに、法制度や家族形態、公的支援などの違いから、国によって「どのような状態にある人をホームレスと呼ぶか」が異なっている。「ホームレスワールドカップ」は大会の運営組織であるため団体として年間を通じて活動を行っている訳ではない。各国においてその国の貧困、ホームレス事情に精通する団体が、日常の活動、選手選考、派遣準備などを行い、年1回の大会に選手を派遣している。したがって、大会への出場を起点にした社会復帰への道筋の描き方も各国で異なり、活動内容のみでなく、スポーツ、フットサル、ホームレスワールドカップ大会に対する期待や、活動全体における位置づけも異なっている。本研究では、ホームレスワールドカップに出場している5か国で現地調査を行う。大会への出場の過程において、各国において、何が期待され、何がなされ、実際に何が起こったのか、を検証することにより、貧困削減の一つの方法として、フットサルやスポーツに期待された役割を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

ホームレスワールドカップ大会に出場している5ヶ国(日本、ジンバブエ、カンボジア、オランダ、香港)の活動内容、期待される成果、選手の変化などについて現地調査の結果を元に検証した。具体的には、国ごとに①貧困の背景(社会状況、教育、労働環境、住宅事情等)、②派遣団体の活動内容(日常練習や試合、選手選考、メディアへの対応、資金集めの方法等)、③ホームレスワールドカップへの期待(大会出場までの経緯や事業全体における位置づけ等)、④活動の意

義と成果(ホームレス選手の生活や心理面での変化、公的支援等)の4つであった。調査にあたっては、先行研究や報告書を活用するほか、当事者(選手、OB/OG)、派遣団体、周辺団体、行政などに対して、個別、グループでの半構造化インタビューを行い、さらに活動の一部について参与観察を行いインタビュー調査の結果を補強した。

4. 研究成果

本研究では、初年度に「貧困とスポーツ」「開発と平和のためのスポーツ」に関する研究のレビューと日本における活動に関する検証を行い、その成果を元に2年目以降に4か国の活動について現地調査を行った。各国において、2回~3回の現地調査を行い、関係者や裨益者への聞き取りから貧困削減に寄与するスポーツの役割を導き出した。

2015年度は、①貧困とスポーツに関わる先行研究の検討、②ホームレスワールドカップについて公表されている成果等の検討、③日本の事例の検証を行った。①②については研究計画の当初予定通りに、③については計画を変更して行き、さらに2年目以降のフィールドワークの準備のためにホームレスワールドカップ大会を訪れ、各国の関係機関、関係者に対するインタビュー調査を行った。日本の事例(ホームレスワールドカップ日本代表の活動)についてフィールドワークにおける質的調査と量的調査の併用を試みたが、言語や調査期間、調査環境等の問題が明らかになり、次年度以降については質的調査のみを採用することとした。

2016年度は、それまでの研究で予備調査を完了していたジンバブエについて、YASD(Youth Achievement Sports Development)を対象に本調査を行った。また、カンボジアのHFCA(Happy Football Cambodia Australia)、香港の街頭足球(Street Soccer Hong Kong)を対象に予備調査を行った。ジンバブエでの調査の結果、YASDの活動が対象とするコミュニティの開発段階や人々の生活課題に合わせて目的や内容を変化させており、これらの変化が紛争や災害の復興段階と重なる特徴を有することが明らかになった。

2017年度は、前年度に予備調査を行ったカンボジアで本調査を行った。HFCAの過去の活動参加者(OB)に対する聞き取りを実施するためにRe-Union Cupと呼ばれる「同窓会」の機会を活用し、5か所の調査ブースを設けて一斉にインタビューを行う大規模な調査を行った。その結果、HFCAの活動がホームレスワールドカップへの参加の成果を最大化するハブとなる存在であり、就職や就業といった目に見える(個人的な)生活の変化を経験した者が多いことが明らかになった。

2018年度は、オランダのLGF(Life Goals Foundation)を対象に調査を行い、特にLGFが行う“Social Sport Coach”(SSC)の育成プログラムに焦点を当てた。オランダのスポーツは、近年、社会福祉の距離を近づけており、社会的コーチングの手法を用いることによって、貧困削減はもとより、貧困の原因になり得る社会課題の解決に「個人のレベルで」アプローチを試みていることが明らかになった。

2018年度後半には、すでに調査を終えていたジンバブエ、カンボジア、オランダの事例について比較検討を行った。その結果、活動の成果は(各国において程度の差があるが)SEMで分類される「個人」「対人」「コミュニティ」「社会」の異なるレベルにおいて見られていた。しかし、SEMの「個人」や「対人」に位置付くが、例えば、活動の成果として参加者が同じ能力を身に付けたとしても、属する社会によって活かされるか否かが異なること、すなわち「スポーツ実施による絶対的貧困への寄与の一般化は可能であるが、相対的貧困については個別事例の特殊性が大きい」ことが明らかになった。絶対的貧困とは、衣食住といった人間の生存条件を脅かす貧困、相対的貧困とは、人が暮らす地域の平均的な文化・生活水準と比して著しく低い状態

にある貧困と説明される。絶対的貧困に対するスポーツの成果は、大会への出場後にプロ選手になったり、指導者になったりと全ての国で見られ、一般化が可能であった。しかし、相対的貧困については、例えばジンバブエとオランダの選手が同じソーシャルスキルやコミュニケーション能力を身に付けても活用する機会の差が大きく、ジンバブエの場合は(相対的貧困もあるものの)絶対的貧困の文脈においてのみ大会参加の意義が見出された。「貧困削減にスポーツは寄与する」という結論は得たものの、絶対的貧困と相対的貧困を分ける必要性が認められ、また、相対的貧困へのスポーツの寄与は、①社会、経済状況に左右される、②当該国で活動を行うパートナー団体の(大会前後の)活動が重要であるという結論に至った。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 13 件)

- ・ Chiaki Okada “‘Sport for Development’ in Japan”, *Journal of Sport for Development* Vol.6 No.11, 2018, P.15-20, Peer-Reviewed
- ・ Chiaki Okada “The development strategies of ‘Poverty and Sport’ related organizations”, *Osaka Human Sciences* Vol.4, 2018, P.85-101, No-Reviewed
- ・ 岡田千あき 「スポーツを手段とする貧困削減への取り組みージンバブエの事例からー」人間科学研究科紀要、第44巻／2018年／P.207 - 221／査読無
- ・ Chiaki Okada, Morris Banda "Sport as a Tool to Solve Community Issues in Poverty-stricken Areas in Zimbabwe: The Homeless World Cup", *The International Journal of Sport and Society* Vol.9, Issue1, 2018, P.39-49, Peer-Reviewed
- ・ 岡田千あき 「貧困削減に向けたスポーツの活用に関する一考察」人間福祉学研究、第10巻第1号／2017年／P.67-78／査読無(招待)
- ・ Chiaki Okada “Poverty and Sport – Stories from the Homeless World Cup–”, *Osaka Human Sciences* Vol.3, 2017, P.1-9, No-Reviewed
- ・ 岡田千あき 『貧困とスポーツ』に関わる組織の発展戦略」人間科学研究科紀要、第43巻／2017年／P.67-84／査読無
- ・ 岡田千あき、齊藤一彦 『開発と平和のためのスポーツ』に関する課題整理ースポーツ・フォー・トゥモロウの実現に向けてー」運動とスポーツの科学、第22巻第1号／2016年／P.1-7／査読有(優秀論文賞受賞)
- ・ Kevin Young, Chiaki Okada “Engaging the Field through Retrospective Methods: A Cambodian Story”, *Qualitative Research in Sport, Exercise and Health* Vol.8, Issue5, 2016, P.456-471, Peer-Reviewed
- ・ Chiaki Okada “Twenty Years of ‘Sport for Development and Peace’ in International Society: Towards the Development of ‘Sport for Tomorrow’ in Japan”, *Osaka Human Sciences* Vol.2, 2016, P.85-102, No-Reviewed
- ・ 岡田千あき 「貧困とスポーツーホームレスワールドカップが発信する物語ー」人間科学研究科紀要、第42巻／2016年／P.141-161／査読無
- ・ 岡田千あき 「国際社会における『開発と平和のためのスポーツ』20年」人間科学研究科紀要第41巻／2015年／P.99-118／査読無
- ・ 岡田千あき 「スポーツによる地域開発ースポーツと国際協力ー」体育の科学、第65巻第2号／2015年／P.103-107／査読無(招待)

〔学会発表〕（計 7 件）

- Chiaki Okada “The trial of poverty reduction through sport: The Homeless World Cup”6th International Conference on Sustainable Development,12-13September 2018, Roma, Italy
- Chiaki Okada “Sport for Poverty Reduction by an Organization in Cambodia: The Homeless World Cup” 9th International Conference on Sport and Society,19-20 July 2018, Miami, U.S.A
- 岡田千あき、中井次郎「カンボジアにおけるスポーツを通じた貧困削減（1）ーホームレスワールドカップの事例からー」日本運動・スポーツ科学学会第 25 回大会／2018 年 6 月(広島大学)
- Chiaki Okada, Morris Banda “Sport as a Tool to Solve Community Issues in Poverty Stricken Areas in Zimbabwe: The Homeless World Cup”8th International Conference on Sport and Society, 10–11 July 2017, London, UK
- 岡田千あき「スポーツを通じた貧困削減への取り組みーホームレスワールドカップが映し出す貧困像ー」日本運動・スポーツ科学学会第 23 回大会／2016 年 7 月(北海道科学大学)
- Chiaki Okada “Sport for the purpose of poverty reductionーStories from the Homeless World Cupー7th International Conference on Sport and Society, 3-4 June 2016, Honolulu, United States
- 岡田千あき「社会貢献を目的としたスポーツイベントの形態に関する研究」日本運動・スポーツ科学学会第 22 回大会／2015 年 6 月(日本医科大学)

〔図書〕（計 4 件）

- 岡田千あき「開発とスポーツ」／国際開発学会編『国際開発事典』／2018 年、丸善出版
- 岡田千あき「国際スポーツ施策」／笹川スポーツ財団編『スポーツ白書』／P.70-P.71／2017 年、笹川スポーツ財団
- Chiaki Okada, Kazuo Uchiumi “Sociology of Sport in Japan” in Kevin Young, (eds.) “Research in the Sociology of Sport Vol.IX(9), Sport, Social Development and Peace” Sociology of Sport: A Global Sub discipline in Review,P.59-74,2016,Emerald
- 齊藤一彦、岡田千あき、鈴木直文編「スポーツと国際協力学スポーツに秘められた豊かな可能性ー」／2015 年／大修館書店

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

〔その他〕（計 8 件）

- 岡田千あき／優秀論文賞受賞講演「『開発と平和のためのスポーツ』に関する課題整理ースポーツ・フォー・トゥモローの実現に向けてー」／日本運動・スポーツ科学学会第 24 回大会／2017 年 6 月(武蔵野美術大学)
- 岡田千あき／桃山学院大学 記念シンポジウム 国際ワークキャンプが育んできた『協働』の精神ー未来に向けて、振り返る！」／2016 年 11 月 5 日 (桃山学院大学)
- 岡田千あき「夢ナビライブ 2016 福岡『スポーツのできる国際協力、社会貢献』」2016 年 10 月 15 日 (マリンメッセ福岡)
- 岡田千あき「JICA セミナー 南スーダン：オリンピック初参加とスポーツを通じた平和構築支援」／JICA 南スーダン事務所、地球ひろば／2016 年 9 月 14 日 (国際協力機構市ヶ谷)

- ・岡田千あき「スポーツを通じた開発と平和」 国際協力機構開発とスポーツ推進連絡会勉強会講師／2016年7月8日(国際協力機構市ヶ谷)
- ・岡田千あき「スポーツを通じた国際協力・社会貢献力を育む教育について」公益社団法人私立大学情報教育協会／体育学教育におけるアクティブ・ラーニング対話集会／2016年1月24日 (アルカディア市ヶ谷)
- ・岡田千あき「開発と平和のためのスポーツセミナー」一般社団法人嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター／2015年10月17日 (国際連合大学)
- ・岡田千あき「夢ナビライブ 2015 名古屋『スポーツでできる国際協力、社会貢献』」(ポートメッセ名古屋)

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：モーリスバンダ

ローマ字氏名：Morris Banda

研究協力者氏名：ペトロス チャティーズ

ローマ字氏名：Petros Chatiza

研究協力者氏名：ポリック グローガン

ローマ字氏名：Paraic Grogan

研究協力者氏名：ディコ デ ジャガー

ローマ字氏名：Dico de Jagar

研究協力者氏名：川上翔

ローマ字氏名：Sho Kawakami

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。